

マリオ・バルガス＝リョサ『激動の時代』を翻訳して

マリオ・バルガス＝リョサ著、久野量一訳
『激動の時代』
作品社、2025年

マリオ・バルガス＝リョサの『激動の時代』（作品社）を翻訳刊行した。さかのぼってみれば、翻訳がほぼ終わり、さて「あとがき」を書こうかという時に著者が亡くなった。89歳になったばかりだった。その誕生日をペルーのリマで祝うバルガス＝リョサ家の家族写真がメディアに公開された。それを見た瞬間、ガブリエル・ガルシア＝マルケスが亡くなったときの光景とダブった。彼も亡くなる直前、やはり誕生日にメキシコシティにある自宅の外に出て、居並ぶ報道陣やファンに最後の姿を見せたのだった（Youtubeで見たあの映像で最も印象に残っているのは、ガボを見つめる秘書のモニカの表情だ。何かを覚悟したかのような寂しさがその目に浮かんでいた）。『激動の時代』の中には、バルガス＝リョサの『百年の孤独』への長年の愛着の思いが響いている。ユナイテッド・フルーツ社がラテンアメリカで行なってきた悪業を書く時、バルガス＝リョサの筆致はガルシア＝マルケスのそれをなぞっていくのだ。

書き始めた「あとがき」では、二作のこういう関係について少しだけ触れようとしたのだが、その草稿を読んだ著作権継承者から、『百年の孤独』との比較部分について削除の要請を受けた。継承者にしてみれば、こういう比較は、バルガス＝リョサ作品のオリジナリティを薄めているように思えたのかもしれない。しかしこの作品はどう読んでも、過去の悶着も含めたこの二人のややこしい関係をあらためて思い出させるのだ。

翻訳をするには、その著者のことを深く理解することが必要だが、学生たちとバルガス＝リョサ作品を読んできたことが大きな助けとなった。彼の小説は「ラテンアメリカ文学」を学ぶうえで中心に置かれるが、文庫版という手に入れやすい版が存在する現実的な利点もあって、授業でテキストとして用いてきた（その点で『百年の孤独』も文庫化されたことで、身近なテキストになった）。たとえば初期の代表作でペルーの政治腐敗を描いた『ラ・カテドラルでの対話』。あるいはペルーと繋がりのあるフローラ・トリスタンと孫のポール・ゴーギャンの伝記『楽園への道』。この二冊を通じてこの作家の人称の使い方に興味を覚える学生が出てきて、それがヒントになって、学生とともに、自由間接話法や二人称小説、対位法的な語りというバルガス＝リョサが若い頃に挑戦した、当時は斬新な、しかしやや読みにくい書き方を多少体系的に整理することができた。

初期の作品（『緑の家』や『ラ・カテドラルでの対話』）で試みられたことは、後年でも引き続き彼の小説執筆の支えになったことは間違いないが、それでも晩年の作品は初期よりもずっと読みやすくなっている。そうした長い遍歴を追ってきて、バルガス＝リョサを訳

す勇気がついたというか、自分でもやれると思えるようになった。実際、『激動の時代』を訳している時、バルガス＝リョサの書き方、特に人称の使い方にはある程度の予想がついた。たとえば3章の最初の数ページがそれにあたる。この場面でグアテマラの大統領ハコボ・アルベンス・グスマンは回想する際、自身を呼ぶ人称が二人称と一人称で揺れる。どうということのない箇所とはいえ、こういう細部にたじろがず、むしろ楽しみながら翻訳することができたのは、ほかの彼の作品を読み込んでいたからだ。もちろどこも楽に訳せたというわけではなく、難しい箇所もあり、至らない訳文もあるには違いないのだが。

バルガス＝リョサの旧作を読み直している時、後期の代表作となる『ケルト人の夢』の翻訳が出た。帝国主義、暴力、ラテンアメリカ文学、『百年の孤独』といった流れを一本の線で繋げていくと、『ケルト人の夢』もまたその線上に置かれる。『ケルト人の夢』でベルギーによるアフリカ搾取の歴史をつぶさに知らされていくうちに、『百年の孤独』の最後のほうでベルギー人が出てくることの必然性に気づかされる。その人物はベルギー人でなければならなかったのだ。アメリカ大陸の名もなき人たちの経験に関心があるのなら、歴史家たちによるいわゆる学術的な成果はもちろん貴重だが、この二人の作家を読んでもることによって、必ずしも既存の学術的な枠組みでは捉えきれないこの地域が見えてくる。

『激動の時代』は2025年8月に本屋に並んだ。それからおよそ5ヶ月後の2026年1月3日、米国がベネズエラの石油利権を求めて大統領を捕らえた。CIAも加わった軍事作戦という話だが、『激動の時代』は1950年代の中米に起きた、これとよく似た歴史を物語っている。しかもそれでいて、この小説では2026年現在の米国大統領の名前が言及される。そんなふうに過去と現在をつなげて書けるのも、バルガス＝リョサがアメリカ大陸をしっかりと見続けていたからだ。『激動の時代』は、そういう暴力に満ちた世界に私たちが生きてきたこと、今もその世界にいることを忘れさせない読み応えのある小説である。

(久野量一)

